



TITLE:

浦富キャンプ

AUTHOR(S):

稲葉

CITATION:

稲葉. 浦富キャンプ. 天界 1926, 6(69): 544-545

ISSUE DATE:

1926-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160592>

RIGHT:

浦 富 キ ヤ ン プ

稻 葉 記

話の起つたのが六月九日、「時の記念日」の講演が三條青年會館で開かれた夜であつた。偶々キャンプの話が出て、鳥取縣浦富海岸の天氣の良い事等聞かされ食指が動いたわけ。同館のキャンプが八月十日に終るので、吾々は直ぐ其の後を受け、一週間許り清空で觀測する事とし、丁度其頃はヘルセウス座流星群の出現時故、此れの觀測が主な目的とされた。従つて器械も極く簡單で、三吋望遠鏡と六分儀とだけ。一行は山本先生の御家族御揃ひを始めとし、天文臺の中村氏、學生の渡邊、森川兩氏及び小生の八名。八月六、七日頃から京都は曇天続き、切角浦富まで行つて雨に降り籠められてはと氣が氣ではない。

八月十日。午前八時京都驛發、望遠鏡や六分儀は人手に任せられぬので客車に持ち込む。渡邊氏と明日出發。途中はトンネルと煤煙に困しめられ乍ら午後三時、鳥取から二ツ手前の岩美驛着、直ちに自動車二臺に分乗浦富海岸へ。此處には既に中井牧師の一團と、神戸女學院の一組が分宿してゐた。が吾々の爲めに、北向きの山腹に建つ、小高くても見晴しの良い二十坪許のバツクをあげて呉れる。食事は女學院の一行と共にする事となり賄は先方と、山本先生の御家内まで受持ち、吾々は皿洗ひ、水汲を受け持つ。かうして半ば自炊生活で觀測に従ふ事になる。

此處は南を山にさへぎられ、北は日本海に臨んで涼しい事此の上もない。南はよく見えないが砂濱まで下れば、蝎や射手の大部分は見る事が出来る。午後七時頃からそろそろ曇り出し、八、九時頃までは星が現れたり消えたり、今夜はさても駄目だと思つてゐる内、九時を過ぎる頃から次第に晴れ始める。あの美しい銀河が中央に、はつきり浮出た様に横はり、凡ての星も活々として輝いてゐる、さても京都で見る比でない。吾々の喜びは譬へ様もなく早速三時を濱に下し、先づ天の名所を見物する。星像に少しの動搖もなく此の小望遠鏡でも大抵のものが見える。正しき時間を知る爲め明朝一時にある、木星衛星の蝕を待つ。其れ迄變光星の觀測や、ヘルセウス

座流星群の出現如何を見る。

八月十一日。ペ座群(以下斯様に略す)も多少現はれるが疲勞してゐるので木星衛星の蝕の時間測定後直ちに就寝、時に午前一時半。晝間の時間は、太陽黒點觀測の外は午睡を取る者、讀書する者、或は海水浴をなす者等勝手な行動をさる。午後渡邊氏來られ、これで全部揃ふ。中村氏は鳥取へ行き懷中電燈其他必需品を種々買集めて夕刻歸浦。女學院の職員 Miss Field の立案で料理をボートで運び、稍遠い濱で食事する事になる。途中で波が荒くなり大まごつき。兎に角濱に上つて夕飯を済ます。此の濱からは思ひ懸すも海面への日没を見る事が出来た。惜しい事に今日は何等、其の爲めの準備をして居なかつたので、單に green flash の現象を見ただけ。今夜も七、八時頃は全天雲に覆はれたが九時頃からは前夜の如く晴れる。で三時を濱迄下し變光星の觀測。

八月十二日。午前一時起床、晴天、ペ座群觀測の外に變光星觀測もあるので三時や六分儀も濱に持出す山本先生以下五名、全天の星圖を各自に分つてペ座群を待ち受ける。斯くて月なく暗い濱の彼方此方に觀測者の懷中電燈が忙がしく閃らめく。折々は暇間を盗んで變光星觀測。金星が東の山に登つて曉の近きを告ぐる頃黃道光は東天を壓し其の舌狀の焰を、火星附近迄も延ばす。地平線が見得る様になつてから六分儀で緯度觀測。併し四時を過ぐる頃から雲が次第に現はれ遂に觀測は全く不可能となる。五時頃寢に就き二度目の起床が九時。黒點觀測は望遠鏡が赤道儀式でないので甚だ困難である。夕食後は一同、各自所有の望遠鏡や双眼鏡を持つて日没時間測定に出懸ける。直ぐにも見えるだらうと思つたのに山が海に迫つて居るので可成り歩かなければならなかつた。

八月十三日。起床一時。晴れ。今日は最もペ座群が多數出現する筈である。無言の内に緊張されて行く。豫想通り懷中電燈の閃きは殆んど連續的に彼方此方に起る。雲の爲め中止した四時頃迄に最も多かつたのが北緯五十

度以北の圏内で記録されたもの六十個許り。又四十個餘り記録された部分もあり、全天では非常な数に上つた。夜間かうやつて長く起きて居ると空腹を感じるので今日からはサンドウィッチを作つてもらひ其れを頬張り乍ら空を見つめる。此の流星を観測する處を見度いさて Miss Field や Miss Gwin が暫らく見学して居た。

九時頃まで一寢入り。晝間は例に依つて黒點観測以外は自由行動。今夕も日没観測に出懸けたが相憎横雲の爲め残念。夕刻、望遠鏡を見せて呉れそ來た者二十名許り。九時頃まで曇りだつたので其の後暫らく観望する。

八月十四日。例に依つて午前一時起床。申分なき星月夜。昨日に比し、ベ座群はすつと少なくなり、多かつた處で三十個餘り。變光星や緯度の観測をして居る内。四時を過ぎて又も曇り出す。斯く日没後と日出前に時を定めて雲の出るのを却つて天氣の安定な事を示すのかも知れない。九時頃二度目の起床。黒點観測をする一方では、正確な時間を知る爲めに月、太陽間の距離を六分儀で測定する。尙観測に用ひる時間は、持参した内の一個の時計を標準時計として撰び、涼しい處に保管し此の時刻に依つて居る。今日の日没時測定には山本先生の御令息進君に時計の秒を讀んでもらつて皆なで観測する。正に海に没せんさする時、太陽の形は刻々に變化し、或は梯形に或は弧形になつて、變化極まりない。

八月十五日。例の時刻に起床。今日の流星

の状態は殆んど普通に復した様で、夜明けまで何處の部分も大抵十數個、而もベ座群に屬するは殆んどなく凡て他の群に屬するもの許さ言つてよい。前日や前々日に比して頗る閑散、従つて變光星其他の観測に三時が忙がしく働く。併し例日の如く、金星が東天に登つて其の火影を海面に寫し、燦として赫やく頃になるさ、西方から次第に雲が流れ來て遂に全天を覆ふて了つた。晝間の黒點観測、夜間の變光星観測、仕事は毎日同じ事で別に變つた事もなく、天氣も又毎日、同じ時刻に晴れて同じ時刻に曇る。

八月十六日。ベ座群の出現も終りを告げたので主な目的は達したわけ。それに相憎水變りにあてられた者も出來たので今日は一日休養となり、明日出發の準備等する。

八月十七日。午前八時一同勢揃、自動車を飛ばして八時半の汽車で、思ひ出多い此の土地に別れを告げ鳥取へ向ふ。兎に角一週間の観測生活に晴天続き、一日も曇に閉込められた事さへなく、思ふ存分の仕事が出来た事は實に大成功であつた。三十分間許り鳥取着。同市に於ける本會々員大坪氏に用事あり、訪問したれど相憎御留守、丁度來合せた、同じく會員の西尾氏が案内して下さつて市中目貫の通りや城跡を見物する。Miss Coe の宅で山本先生御一家に別れ歸途には大坪氏にも面會する事が出来、正午過ぎの汽車で一同歸途に就いた。

○月の砲撃は不可能

近頃ロンドンから發せられた United Press 通信社のニュースに據れば、さき頃、露都モスクワに於いて或る人士が大砲で月世界へ物を投射することを考へてゐるさといふ噂が立つた時、英國の理學者 A. W. Bickerton (ピカートン) 教授がテイリ・メイル新聞記者に語つて此の計畫が不可能のものであることを聲明した。曰く

「地球の引力に打ち勝つためには投射物が毎秒七マイルの速度を有つ必要がある。さて、一グラムの物體を此の大速度で投げることが爲めには 15180 カロリ 1 のエネルギーを必要とする。

しかるにクラブ砲の砲丸一グラムのエネルギーは 100 カロリであるし、又、かの巨彈ベルタ (歐洲大戰當時、獨逸軍がパリ市街を遠距離から砲撃した彈丸の俗稱) の一グラムは 400 カロリのエネルギーの持ち主である。今日の最も強烈な爆發藥——ニトロ・グリセリン——の一グラムも 1500 カロリ以上のエネルギーを持たない。故に此の爆發藥が自己の重量を地球外へ持ち運ぶたけでも、現在のエネルギーの十倍以上のエネルギーを要する。空氣中で四マイルの距離に物を投げるがためには一グラムを 7500 カロリのエネルギーで投げなければならない。どうして此の大きなエネルギーを吾人は得られるか? さて、さて!!」